

平成 22 年 5 月 17 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520235

研究課題名（和文）アルベール・カミュの世界—絶えざる価値探求と源泉への回帰—

研究課題名（英文）Albert Camus and his world – permanent search for new values and return to the roots –

研究代表者

松本 陽正（MATSUMOTO YOSEI）

広島大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90140558

研究成果の概要（和文）：「不条理」の認識から出発し、「反抗」を説いたアルベール・カミュ（1913-60）は、「反抗」以外にも、「正義」「無垢」「名誉」「男」といった、困難な時代を生きる支えとなる価値を生涯に亘って探求し、提出し続けてきた。と同時に、カミュは、源泉となった『裏と表』（1937）を書き直すこと、すなわち、貧しい子供時代の再作品化を生涯に亘って夢想し続けてもいた。カミュの文学の本質は、このような、絶えざる価値探求と源泉への回帰願望という大きな二つのうねりにある、と考えられよう。

研究成果の概要（英文）：Starting from the knowledge of the « absurd », Albert Camus (1913-1960) stresses the need for « rebellion ». But, he won't let the matter rest there : all his life, he goes on searching and submitting values, such as « justice », « innocence », « honour », « man », etc., that keep us going through hard times. In the same time, Camus follows his dream to rewrite *L'Envers et l'endroit* (1937), his own root, that is to say rewriting his poor childhood. The essence of Camus' literature consists of these two directions : towards a perpetual search for new values and towards the strong wish of a return to his roots.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	200,000	60,000	260,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：仏文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 報告者は、平成 11 年、博士論文（「アルベール・カミュの遺稿 *Le Premier*

Homme 研究 — カミュの作品における家族の肖像といくつかのテーマの変遷を中心に—）を駿河台出版社より上梓していた。

(2) 同論文では、遺稿『最初の人間』 *Le Premier Homme* が、ある意味でカミュの「到達点」を示しているという観点から、初期作品から『最初の人間』に至る全作品における「家族像」といくつかのテーマ（「子供」「男」「名誉」）の変遷を追い、それらがいかにして『最初の人間』に収斂していったかを跡づけた。とともに、『最初の人間』の形成過程の検証や前作『追放と王国』との関係の測定等によって、『最初の人間』執筆がカミュのライフワークであったことを論証した。

(3) ところで、『最初の人間』はこのようにカミュの「到達点」を示してはいるが、この遺稿は処女作『裏と表』の世界に回帰したものである以上、同時に「出発点」（源泉）を画してもいる。カミュの「到達点」については、上述の論文で一つの区切りをつけてからは、カミュの「源泉」という観点から、初期作品からカミュの全作品を洗い直すことによって、カミュ文学の本質が、絶えざる源泉への回帰願望にあることを論証できるように思っていた。

(4) また、「子供」「男」や「名誉」などのテーマの分析によって、よく知られている「不条理」や「反抗」の他に、これらのテーマの存在とその重要性を提示していたが、このことから、カミュ文学のもう一つの大きなうねりは、絶えざる新たな価値探求にあるのではと考えるようになっていた。

2. 研究の目的

(1) ①カミュは常に「ゼロ」から出発し、生きるための価値を構築し、それが瓦解するや《recommencer》（「再び始める」「やり直す」）しようとした作家だった。よく知られ

ているように、文壇への本格的なデビュー作『異邦人』や『シーシュポスの神話』において、カミュは「不条理」を説き、一種の「白紙状態」、「ゼロ」地点を出発点とした。このように「不条理」から出発したカミュは、続く「第二の系列」では「反抗」を描き出し、「正義」の価値を説くこととなる。対独協力者粛清裁判等によって、「正義」に立脚することが困難になると、「名誉」を希求し、そして晩年には「男」のモラルを作品化することになる。

②このように、カミュは「ゼロ」から出発し、困難な時代を生き抜く新たな価値を常に創造しようとし、それが失敗に帰するや、《recommencer》しようとした。ともすれば「不条理」の作家というニヒリスティックなイメージが付与されがちなカミュ像を全面的に否定し、カミュ文学の本質が、生きるための、絶えざる価値探求・価値創造にあることを論証すること、それが今回の研究目的の一つである。

(2) ①カミュがライフワークともいえる『最初の人間』の着想を得るのは1953年である。さらにこの年、カミュは「源泉」を再発見し、源泉への回帰を決意してもいる。このように、<1953年 40歳>は、カミュにとってターニングポイントとなっている。

②だが、源泉への回帰願望は、1953年以前からすでに存在していた。カミュが「源泉」とする、処女作『裏と表』出版以前より、『裏と表』を書き直す決意をカミュは固めていたし、自伝的世界の作品化についてのメモが1953年以前の『手帖』に散見されるからである。この間の経緯、ならびに1953年以降の源泉への回帰志向がどのようなプロセスを辿り遺稿『最初の人間』へと結実していくかを詳細に調査し、跡づけ、源泉への回帰願

望が生涯に亘って存在していたことを論証することも、今回の研究目的の一つである。

(3) したがって、カミュの文学には、絶えざる価値創造、それと並行する源泉への回帰願望という大きな二つのうねりがあることを論証すること、それが今回の研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) 3年計画の研究であったため、アルベール・カミュの生涯をカミュ自身の分類とも一致する、3つの時系列に分け、それぞれの時期について、

- (A) 探求され、称揚されている価値
- (B) 源泉への回帰願望の痕跡

を辿った。すなわち、初年度は初期作品ならびに「第一の系列」(不条理の系列)の作品群を、2年目は「第二の系列」(「反抗の系列」)の作品群を、最終年度は「第二の系列」以降の作品群を研究対象とし、資料収集・資料整理ならびに執筆にあたった。

(2) 初年度には、日本カミュ研究会で研究発表を行い、研究の方向性を国内のカミュ研究者に提示した。年に2回開催される日本カミュ研究会にはいずれの年度もすべて出席し、カミュ研究者と意見交換をはかった。

(3) 初年度と最終年度には渡仏し、B.N.(国立図書館)などで資料調査にあたりるとともに、パリ第三大学ジャンヌ・ヴエラン教授のレビューを受けた。最終年度は、ヴエラン教授のみならず、国際カミュ学会会長のアニェス・スピケル女史とカミュの遺稿『最初の人間』をめぐって刺激的な意見交換を行い、きわめて有意義だった。

4. 研究成果

(1) 3年間の研究をとおして、アルベール・カミュ文学の本質が、

- (A) 絶えざる価値探求
- (B) 源泉への回帰願望

にあることを、この両側面の軌跡を辿ることによって明らかにした。

(2) ①カミュは自己の作品をいくつかの「系列」に分類し、「第三の系列」の草稿までを残している。すなわち、「第一の系列」(「不条理の系列」)の作品群(『異邦人』(1942)、『シーシュポスの神話』(1942)、『誤解』(1944)、『カリギュラ』(1945))、「第二の系列」(「反抗の系列」)の作品群(『ペスト』(1947)『反抗的人間』(1951)『戒厳令』(1948)『正義の人々』(1949))を完成させた後、「第三の系列」への移行期の作品群(『転落』(1956)『追放と王国』(1957))を発表後、「第三の系列」の中心となるはずの小説『最初の人間』を執筆中、1960年、交通事故死してしまうのである。

②「第一の系列」のメインテーマは、言うまでもなく、「不条理」である。『手帖』にあるように、「不条理」は白紙状態、「ゼロ」地点ではあるが、『異邦人』の結末部で幸福感に満たされる主人公ムルソーや、「シーシュポスを幸福だと思わねばならぬ」という『シーシュポスの神話』の最後の一文、さらには死を間近にして自己の生を肯定する「不条理の系列」の主人公たち(ムルソー、カリギュラ、『誤解』のマルタ)の姿から、「不条理」の認識に、逆説的だが、生の肯定という積極的な価値が付与されていることがみてとれる。あわせて、「不条理」から「反抗」への移行は必然的なものであったことも指摘した。従来、否定的に捉えられがちだった「不条理」にこのような肯定的な価値を認める視点は、斬新なものであり、カミュの文学の本質が、

絶えざる価値探求にあるという本研究の出発点を論証することができた。この成果は「雑誌論文」③にまとめた。

③「第二の系列」の諸作品でカミュは、よく知られているように、「反抗」や「正義」の価値を称揚する。しかしながら、対独協力派粛清問題によって「反抗」や「正義」に立脚することが困難になると、「無垢」や「名誉」を希求するようになる。さらにこの時期に初めて、「子供」に対して重要な意味が付与されてくるようになる。カミュの作品に初めて登場する「無垢」の象徴としての「子供」について論を展開し、フランス語で発信した論考（「雑誌論文」②参照）は、後でも触れるが、パリ第3大学ジャンヌ・ヴエラン教授や国際カミュ学会会長のアニェス・スピケル女史の高い評価を得た。

④遺稿『最初の人間』 *Le Premier Homme* では「男」« homme » の価値が大きく浮かびあがってくることとなる。このように生涯に亘ってカミュは、20世紀という困難な時代を生き抜くためのバックボーンとなる価値を探求し、提出し続けるのである。ところで、『最初の人間』に示された「男」の規範は、初期作品『結婚』所収の『アルジェの夏』に規定されていた「男」の規範と一致するものでもある。したがって、このような価値探求の変遷の軌跡からも、興味深いことに、カミュの源泉への回帰願望の帰結をみてとることができるのである。

(3) ①「源泉」« source » という言葉を手がかりに、カミュの初期作品群、とりわけ『裏と表』所収の『肯定と否定のあいだ』から「源泉」の具体的な姿をさぐった。カミュの「源泉」、それは黙して語らぬ母との絆を見出していく息子の姿であり、また、アルジェの下町での「貧しい子供時代」に他ならない。と

同時に、『夏』所収の『チパザに帰る』(1953)の中で「チパザ」を「喜びの源泉」としていることから、『結婚』(1939)所収の『チパザでの結婚』に描かれている自然との合体も、「源泉」のもう一つの側面 — 生の「源泉」 — として見落としてはならない。

②『手帖』にある「貧しい子供時代」の作品化構想の軌跡を辿り、カミュが「源泉」への回帰の必要性を絶えず意識していたことを再検証した。とともに、1953年が「源泉」再発見の年であり、また「源泉」への回帰を決意する年でもあり、さらにはライフワークともいえる『最初の人間』のタイトルを着想する年でもあることに言及し、1953年がカミュにとってターニングポイントとも言うべき決定的な節目の年となっていることを確認し、1953年までの「源泉」への回帰願望の軌跡を明らかにした。

③『手帖』や手紙の証言を追えば、1953年以降も、カミュが「源泉」への回帰願望を抱き続けていたことがわかる。1960年に交通事故死した折、カミュが鞆の中に所持していた自伝的三人称小説の原稿『最初の人間』は、そのような軌跡のいわば到達点であるとともに、処女作『裏と表』(1937)に回帰した作品でもある。しかしながら、単純な回帰ではない。そこには20年以上に亘る歳月の隔たりやジャンルの違い（自伝的エッセーと小説）によって、微妙な違いが生じている。聖家族化への志向の増大、父の比重の増大、父や兄の「代理」の出現といったような微妙な差異のほか、祖母像の変化に見られるような客観化への志向の増大が認められるのである（「雑誌論文」①参照）。この「雑誌論文」①については、国際カミュ学会の「会報」で言及がなされることになっている。

(4) ①平成19年度、平成21年度に渡仏し、

B.N. (国立図書館)などで資料調査にあたる
とともに、パリ第三大学ジャンヌ・ヴ＝ゲラン
教授のレビューを受けたことは、きわめて有
意義だった。今回の研究も含め、ゲラン教授
からは « école japonaise » (「日本派」)との
評価を受け、同教授が編者の『カミュ事典』
Dictionnaire Albert Camus (Robert
Laffont)への参加を依頼され、3項目 — 内、
一つは « réception japonaise » (「日本におけ
る(カミュの)受容」) — の執筆にあたることも
できた。

②平成 21 年度、資料調査のため渡仏の折、
プレイヤッド版の「参考文献リスト」ならび
に『最初の人間』の「作品紹介文」で報告者
の論文を高く評価してくれている国際カミ
ュ学会会長のアニェス・スピケル女史とカミ
ュ研究仲間の仲介で初めて対談する機会を
得、カミュの遺稿『最初の人間』をめぐって
刺激的な意見交換を行った。その席で、「雑
誌論文」②の抜き刷りを手渡したが、帰国後、
メールで高い評価を受けた。カミュ研究を今
後とも推進するうえで、女史の知己を得たこ
とは、大きな財産となろう。

③今回の研究成果の中で、いまだ欧文で発表
していないものについて、積極的に内外に向
けてフランス語で発信していくことが、今後
の課題の一つである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 松本陽正、Portrait de la grand-mère
chez Camus、『広島大学フランス文学研
究』、査読なし、28 号、2009、pp.22-28.
機 関 リ ポ ジ ト リ ア ド レ ス :
[http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/porta
l/bulletin.html](http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/porta
l/bulletin.html)
- ② 松本陽正、Sur « le fils de M. Othon » de
La Peste、『広島大学フランス文学研究』、
査読なし、27 号、2008、pp.34-41. 機 関

リ ポ ジ ト リ ア ド レ ス :
[http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/porta
l/bulletin.html](http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/porta
l/bulletin.html)

- ③ 松本陽正、アルベール・カミュにおける
不条理について、『広島大学フランス文学
研究』、査読なし、26 号、2007、pp.30-44.
機 関 リ ポ ジ ト リ ア ド レ ス :
[http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/porta
l/bulletin.html](http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/porta
l/bulletin.html)

[学会発表] (計 1 件)

松本陽正、アルベール・カミュの世界 — 絶
えざる価値探求と源泉への回帰願望 — その
1 源泉から「不条理」へ、日本カミュ研究
会、2007 年 11 月 10 日、関西大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 陽正 (MATSUMOTO YOSEI)
広島大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：9 0 1 4 0 5 5 8

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：